

海水浴場に関する海岸工学的研究 (16)

関西大学工学部 正員 ○島田 広昭
 関西大学大学院 学生員 光田 佳也
 関西大学工学部 正員 井上 雅夫

1. ま え が き

著者らは、海水浴場として利用される人工海浜を建設する際の基礎資料を得る目的で、養浜によって新設された人工海水浴場において、その自然条件や利用者意識の調査を行ってきた。本研究では、淡輪海水浴場と箱作海水浴場において、その利用形態や利用者意識などを調査し、多様化しつつある海洋性レクリエーションおよび両海水浴場の間に残された未整備区域に対する海浜利用者の要望や意識を明らかにしようとした。

2. 調 査 方 法

調査は、泉南海岸の南端に位置する、汀線延長が約600mの淡輪海水浴場とその東北東約2kmにある汀線延長が約500mの箱作海水浴場において、1987年7月29日(水)から8月9日(日)の間の平日、土曜日、日曜日がそれぞれ各2日ずつの合計6日間、二つの海水浴場で同時刻に行った。意識調査は、直接面接法によるアンケートで、利用密度がほぼ一定になる各調査日の12時半から15時半にかけて、二つの海水浴場のうちの選択理由や海洋性レクリエーションおよび未整備区域に対する要望など合計22項目について実施した。なお、アンケート対象者数は、淡輪では合計642人(男性328人女性314人)、箱作では合計639人(男性319人女性320人)である。

3. 調査結果とその考察

淡輪と箱作海水浴場はともに泉南海岸にあるが、近接する二つの海水浴場のうちの選択理由を示したものが、図-1である。なお、図中の表には総利用者のうち他方の海水浴場の存在を知っている人を「Yes」、知らない人を「No」として百分率で示している。これによると、箱作では選択理由として、「近い」と答えた人が54.0%いるのに対して、淡輪では10.6%とかなり少なくなっている。また、「その他」と答えた人が、淡輪で56.7%、箱作で28.6%といずれも多くいるが、これについては、図示はしていないが、淡輪では「行き慣れている」や「知名度が高い」と答えた人が多く、箱作では「新しいから」や「今までに來たことがないから」と答えた人がほとんどであった。このことから、淡輪海水浴場より箱作海水浴場のほうが地元の利用者が多いことがわかる。

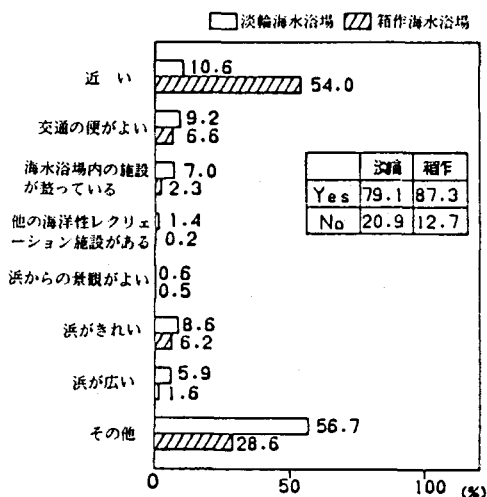


図-1 二つの海水浴場のうちの選択理由

さらに、淡輪より箱作の利用者のほうが他方の存在を知っている人が多くなっているが、これについては、地元の利用者が多いことと開設された年度、すなわち知名度が大きく影響しているようである。

図-2(a)は、両海水浴場の利用者が、二つの海水浴場をつなぎ、一つにする計画のあることを知っているか、いないかを示したものであり、(b)図は計画を「知っている」と答えた人について、(c)図は計画を「知らない」と答えた人について、それぞれ二つの海水浴場を「つなぐほうがよい」「つながないほうがよい」と答えた人の割合を示したものである。また、(d)図は計画を「知っている」「知らない」にかかわらず「つなぐほうがよい」と答えた人について、二つの海水浴場の間をどのように利用したらよいかを調べたものである。これらによると、現在施工中であるにもかかわらず整備計画のことを「知っている」

Hiroaki SHIMADA, Yoshinari MITUDA, Masao INOUE

と答えた人は、いずれの海水浴場の利用者也15%以下であり、ほとんどの人が知らないようである。また、計画のことを知っているか、いないかにかかわらず、いずれの海水浴場の利用者也80%以上の人が「つなぐほうがよい」と考えているようである。さらに、

(d) 図からわかるように、淡輪海水浴場では約55%、箱作海水浴場では約57%の人が「砂浜にして海水浴場にする」と答えている。実際の計画である「磯場にする」と答えた人は、淡輪で約17%、箱作で約12%といずれも少ない。図示はしていないが、「磯場にする」と答えた人は、男性、女性にかかわらず年齢が高くなるほど多くなっている。これらのことは当初の予測と若干異なる結果であった。また、「砂浜にしてウィンドサーフィンなどの専用区域にする」と答えた人は、いずれの海水浴場でも「磯場にする」と答えた人よりも多く、20%程度である。このことは多様化している海洋性レクリエーションを行える場が少ないことが要因であろう。しかしながら、これらは、

海水浴を目的に来ている人だけを対象として行った調査結果であるため、他の目的で来ている人や海水浴場外で一般の人に対しても調査する必要があるだろう。

また、海洋性レクリエーションの中で、海水浴と共存して行えるものを明らかにするため、両海水浴場の海水浴客に対して「この海水浴場で行ってもよいと思うレクリエーションを挙げてください」と質問した結果を示したものが表-1である。

これによると、手軽なボール遊びと答えた人が性別・年齢別にかかわらず、もっとも多く、ついで、フリスビー、ボート、キャンプなどが多く増えており、道具や装置の小さいものが志向されている。また、年齢を10代・20代の若年層と30代以上の高年層に分けてみると、若年層では、ウィンドサーフィンやジェットスキーと答えた人が多く、逆に、高年層では魚釣りやキャンプと答えた人が多くなっている。このことから、海洋性レクリエーションを動的なものと静的なものに分類すると、若年層は動的なものを、高年層は静的なものを志向していることがわかる。このように、年齢層によって志向する海洋性レクリエーションが異なる原因としては、ウィンドサーフィンやジェットスキーなど動的なものは、体力はもちろんのこと技術的にも高度なものが要求されるためであろう。さらに、若年層と高年層を性別で比較すると、高年層ではあまり大きな違いはない。しかし、若年層では男性と女性で若干異なるようであり、女性のほうが男性よりモーターボート、ヨット、ウィンドサーフィン、ジェットスキーなどの動的なものに対しては、いずれも多くなっている。逆に、男性ではフリスビーやキャンプが多くなっている。このことから、男性のほうが女性よりも特定のレクリエーションを志向している人が多いようであり、女性についてはその道具や装置を含めたファッション性の高いものを幅広く志向するようである。

最後に、この調査に助力してくれた、中村往功、畑中徹、増田稔、美崎耕一の各君に謝意を表する。

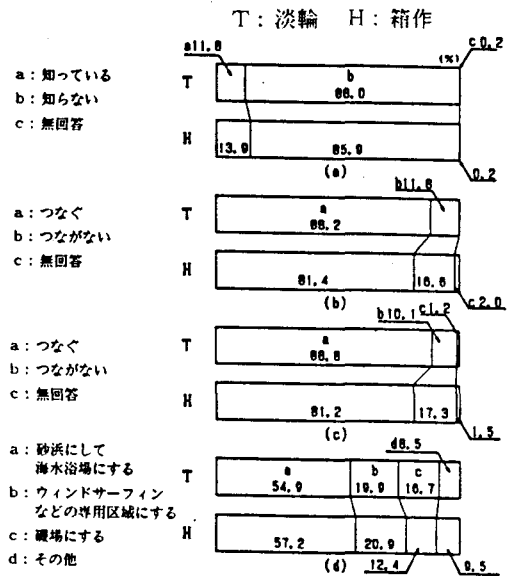


図-2 整備計画に対する利用者の意識

表-1 海洋性レクリエーションの動向 (単位: %)

	ボート	モーターボート	ヨット	ウィンドサーフィン	ジェットスキー	魚釣り	フリスビー	ボール遊び	キャンプ	その他
男性										
10代	14.3	2.9	3.9	6.8	9.5	3.2	18.7	25.2	13.3	2.2
20代	10.9	1.1	3.8	6.3	7.9	3.8	21.5	27.2	12.8	4.7
30代	10.5	1.7	1.1	3.9	3.3	6.6	12.2	35.9	21.0	3.8
40代	15.7	0	1.3	0.7	0	7.8	3.9	38.7	22.9	9.0
女性										
10代	14.9	4.1	6.9	11.6	12.7	5.6	10.2	21.2	10.2	2.6
20代	10.9	4.2	7.4	12.8	9.0	5.8	12.3	23.4	9.3	4.9
30代	12.4	1.8	4.1	2.4	3.6	7.1	12.4	37.9	14.8	3.5
40代	13.7	0	0	0	0	9.8	2.0	51.0	23.5	0